

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 南 龍協

論 文 題 目 朝鮮半島における旧日本軍の駐屯地設定と都市形成に  
関する研究 - 1900 年前後のソウルを中心にして -

(A Study on the Establishment of the former Japanese Military  
Bases and Urban Formation in Korea : Focusing on Seoul city  
around 1900)

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 西澤 泰彦

副 査 名古屋大学大学院工学研究科 教授 恒川 和久

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 宮脇 勝

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 堀田 典裕

副 査 韓国・成均館大学校 名誉教授 尹 仁石

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、1900年前後において韓国・ソウルで展開された旧日本陸軍の駐屯地設定と駐屯地の周辺地域の形成を明らかにするものであり、6章で構成されている。

第1章では、研究の目的と意義、視点、既往研究の批評と学術上の位置付け、研究手法などが示された。

第2章では、城壁都市ソウルの城壁内に日本軍駐屯地が設定されていく過程とそれに伴うソウルの都市構造の変化を論じた。日本軍は、1902～1904年、ソウル城壁内の南山北麓「筆洞」に歩兵1個大隊の永久駐屯地を建設した。それに伴い、この周辺には、多くの日本人が居住する地区となった。その結果、「鐘路」を東西の都市軸として北側と南側が二分されていたソウルの都市構造において、南側の地区の中でも鐘路から離れていた南山の山麓の市街地化が進んだことが明らかになった。

第3章では、日露戦争から植民地支配開始直後の1913年までに建設されたソウル・龍山の陸軍駐屯地について、その設定に関する問題を論じた。1904年に日本陸軍がソウルで新たに設定した軍用地は300万坪であったが、これは、日本陸軍の「軍用地標準面積」に比べて約5.7倍であった。これは、軍用地の中に日本人居住地を設定することを予定した方法であったことが文献調査から明らかになった。第4章は、龍山駐屯地の建設過程と同時に進行した周囲の基盤整備を論じた。駐屯地建設にともなって建設された軍用道路の一般供用、駐屯地以外の土地の民間人への貸下、日本軍の駐留方法の変更にとまなう多数の陸軍官舎の建設を通じて、駐屯地の西側に市街地が成立し、それが、現在の龍山市街地の基になったことを明らかにした。また、当時の日本国内の陸軍兵舎が木造であったのに対し、龍山の兵舎は煉瓦造であったことなど、国内の陸軍施設の違いを明らかにした。

第5章は陸軍部隊増設に伴う軍用地の拡張と周辺市街地の変化を論じた。朝鮮駐屯軍の増設にとまなう軍用地再編により軍用地の払下が始まり、また、陸軍部隊増設にとまなう軍閥家者の人口増加も生じ、それが龍山市街地の発展を呼び起こした。

第6章は結論である。上記の指摘により、日本軍の永久駐屯地の建設は、ソウル城壁内の都市構造を大きく変化させ、ソウルの市街地が城壁を超えて龍山に広がったことの主因をつくっていた。また、当時の日本国内の陸軍兵舎や将校宿舎と比べて、建築構造や設備の面で大きな違いがあった。

以上のように、本論文は、駐屯地設定の問題を建築史・都市史的問題としてとらえた点、さらに丁寧な文献調査による事実の発掘、そして、軍用地設定がソウルの都市形成に大きな影響を与えたことを解明した点が特に優れている。加えて、旧日本軍龍山駐屯地を引き継いだアメリカ軍龍山基地の再開発に対し、そこに現存する遺構に学術的価値を与えた。よって、本論文の提出者南 龍協さんは、博士（建築学）の学位を得る資格があるものと判断した。